

村 長	副村長	課 長	係 長	課 員	担 当

報 告 書

項 目 長峯地区「みらいトーク！」実施報告書

日 時 令和8年7月27日（月）18時30分～20時00分

場 所 長峯交流センター

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 6名

1 目的

令和9年度から始まる第6次総合振興計画の策定に向け、長峯地区の現状や将来への不安、残したいもの、10年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、長峯地区「みらいトーク！」を実施した。

2 実施概要

はじめに、村から第6次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、長峯地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

3 主な意見

（1）人口減少と集落を維持する仕組み

長峯集落は住民数が少なく、地域活動を担う人が限られている。参加者からは、過疎化の現状をユーモアを交えて語る声があった一方で、将来、長峯という集落そのものが維持できなくなるのではないかという切実な不安も示された。

行政区の役員については、限られた住民で繰り返し担わざるを得ない状況にある。今後さらに人口が減少すれば、現在の行政区単位や役職の仕組みでは運営が成り立たなくなる可能性がある。

祭りについても、以前は子どもたちが山車を引いていたが、子どもの減少により、現在は大人を中心に行う形へ変化している。

祭りや行政区等をすべて従来どおり残すのではなく、何のために続けるのかを整理し、役職や作業の削減、近隣集落との連携、活動の統合等を含め、人口規模に合った方法を検討する必要がある。

また、熊対策を兼ねて集落周辺の草刈りを共同で行うことも話題となった。住民が主体的に取り組む場合に、資材、経費、機械等の面で行政が支援できる仕組みが求められている。

（２） 桧原湖と山々を望む景観の保全

長峯集落の大きな魅力として、道路や集落から望む桧原湖、磐梯山、周辺の山々の景観が挙げられた。写真撮影を目的に訪れる人も多く、長峯を代表する地域資源となっている。

一方で、湖畔や道路沿いの木々が成長し、以前はどこからでも見えていた湖や山が、限られた場所からしか見えなくなっているとの意見があった。「景色が良い」と発信するだけでなく、実際に景色が見える状態を維持する必要がある。

国立公園等の制約を踏まえながら、関係機関と調整し、適切な間伐や支障木の伐採を行うことが求められている。景観整備は、観光客のためだけでなく、住民が日常的に美しい景色を楽しむためにも重要である。

また、道路のカーブや坂道に車を止めて写真を撮る人がおり、交通上危険な場合がある。安全に停車し、景色を楽しめる撮影場所や待避スペースについても検討する必要がある。

（３） 子どもや家族が自然を体験できる場所

桧原湖や沼、森林、キャンプ場などの豊かな自然がある一方で、子ども連れの来訪者に案内できる遊び場や、

雨天時にも過ごせる場所が少ないとの意見が出された。

以前は湖や沼で泳いだり、ご飯粒を餌にして魚を釣ったりするなど、自然そのものが身近な遊び場であった。しかし、現在は安全面への不安や、どこで何ができるのか分からないことから、子どもが自然に触れる機会が少なくなっている。

安全に水遊びや釣りができる場所を指定し、利用方法やルールを分かりやすく案内してはどうかという提案があった。また、魚の観察や釣り、アスレチック、昆虫観察、キャンプ等、地域の自然を生かした体験の案も出された。

新しい施設を整備するだけでなく、自然の遊び方を教える人や、親子が参加できる体験活動を用意することも重要である。観光客だけでなく、村内の子どもや家族も利用できる場所とすることが求められている。

（４）道の駅を地域の中心として生かす取組

長峯集落には道の駅裏磐梯があり、多くの人が立ち寄っていることは大きな強みである。一方で、現在の売場、飲食、地域らしさ等については、持っている可能性を十分に生かし切れていないとの意見が出された。

地元で作られた野菜、加工品、手作り品等を充実させるとともに、地域住民が商品を出品しやすい仕組みにする必要がある。

また、飲食や休憩機能を充実させ、裏磐梯の食や地域の人との交流を楽しめる場所にしてほしいとの声もあった。

具体的な案として、ドッグランを設けることで、ペットを連れた来訪者が車を止め、トイレ、飲食、買い物等を利用するきっかけになるのではないかという提案が出された。

冬季については、大量に積もる雪を除雪するだけでなく、かまくら、そり遊び、雪上での写真撮影等に活用してはどうかという案があった。地元の高齢者等が餅や甘酒を提供することで、地域らしい冬の体験と、小規模な仕事や役割につなげることも考えられる。

道の駅を、観光客が休憩するだけの施設ではなく、地域の産品、食、雪、自然、住民との交流を体験できる中心的な拠点として育てる必要がある。

(5) 豪雪・公共交通と暮らしの継続

冬季には非常に多くの雪が積もり、道路の除雪だけでなく、自宅の玄関から道路までの除雪や屋根雪への対応が大きな負担となっている。

過去の大雪時には、除雪機械のトラブル等により対応が長期間滞り、建物の軒先等に被害が生じたとの話もあった。

現在は一部の住民が、一人暮らし世帯等を含めて周辺の除雪を支えているが、その担い手がいなくなれば、集落で生活続けること自体が難しくなるとの不安がある。

補助金を交付するだけでなく、実際に除雪作業を担う人を確保し、特定の住民に負担が集中しない仕組みが必要である。

また、路線バスの本数が少なく、将来運転免許を返納した場合、買い物、通院、行政手続、投票等の日常生活に必要な移動が難しくなるとの意見があった。

現在の路線バスだけでなく、デマンド交通、ライドシェア、地域内送迎等を組み合わせ、住民と観光客の双方が利用できる交通の仕組みを検討する必要がある。

買い物についても、住民が店舗まで移動する方法だけでなく、移動販売や宅配等を組み合わせることが今後必要になる。

(6) 雪国で暮らす移住者への支援

長峯や裏磐梯の自然に魅力を感じる人がいる一方で、雪の多さは、移住後の生活をするうえで大きな負担となる。

移住者に住宅や補助金を紹介するだけでなく、除雪機の使い方、屋根雪への対応、冬季の運転、地域での助け合い等、雪国で暮らすために必要な知識や技術を伝える必要があるとの意見が出された。

移住後の一定期間、地域住民や行政が除雪方法等を教え、最終的には自ら冬の暮らしへ対応できるよう支援してはどうかという具体的な提案もあった。

地域の良い点だけでなく、雪、交通、医療、買い物等の厳しい面も事前に伝えたいと、それでもこの地域で

暮らしたい人を定着まで支えることが重要である。

(7) 上水道・神社等の地域基盤の維持

長集落では、上水道を住民自らが維持・管理していることが共有された。住民によれば、村内でも珍しい自主的な管理形態となっている。

住民数が減り、管理を担う人も高齢になる中で、集落だけで将来にわたって維持することには限界がある。生活に不可欠な水を確保するため、村による管理や支援を含め、今後の上水道の在り方を総合振興計画の中でも検討してほしいとの具体的な要望があった。

また、長峯神社についても老朽化が進み、修繕や建て替えを検討する時期を迎えている。一方で、住民数が少ないため、集落だけで費用を負担することは難しい。

宗教施設であることから、行政による直接的な支援が難しい面はあるものの、神社は祭りや地域文化、住民のつながりを支える施設でもある。活用できる制度や相談先の情報提供など、地域が今後の方向性を考えるための支援が求められている。

(8) 交流センターを本来の交流拠点へ戻す取組

長峯交流センターについては、改修前に住民と行政が長期間話し合い、住民が日常的に集まり、囲炉裏等を囲んでお茶を飲み、写真撮影等で訪れた人とも交流できる場所にしたいという構想があったとの話があった。

新たな施設を建設するのではなく、交流センターを本来目指していた使い方へ近づけ、住民が日常的に集まれる場所として活用する必要がある。

公民館が実施しているふらっと事業や、移住者と住民が交流する村暮らしカフェ等の取組とも連携し、定期的にお茶を飲みながら気軽に話せる場をつくることが考えられる。

高齢者、若者、移住者、観光客等を分けるのではなく、多様な人が緩やかに交流できる場所とすることで、地域内のつながりを再構築することが期待される。

(9) 個性的な人を地域資源として生かす取組

長峯周辺では、地域外から移住・通勤しながら、飲食、お茶や食文化、動物との触れ合い、写真等に関す

る個性的な活動を行う人がある。

高齢になっても地域で活動続ける人、その活動を支えるために地域外から定期的に通う家族、自然環境に価値を見いだして建物を取得する写真家など、人そのものが新しい来訪者を呼び込む地域資源となっている。

こうした人々は、単に観光施設を整備するだけでは生まれない、長峯や裏磐梯の魅力をつくっている。

地域の不便さを含めて価値と感知、自然、食、文化、写真、宿泊等を生かして活動したい人に対し、住居、空き施設、改修、起業、事業承継、地域との調整等を一体的に支援する必要がある。

また、地域の高齢者が、食、文化、案内、物販等を通じて無理なく役割を持ち、小規模な収入を得られる仕組みも検討する必要がある。山城や景観の近くに小さな休憩所を設け、団子や飲み物等を提供するといった案も出された。

(10) 村内の役割分担と地区を越えた連携

北塩原村は、北山、大塩、桧原・裏磐梯など、歴史、生活圏、主な産業が異なる地域によって構成されている。

参加者からは、合併の経緯や過去のしがらみを引きずるのではなく、それぞれの地域が得意とする分野を生かして連携する必要があるとの意見が出された。

一例として、全国的な知名度を持つ裏磐梯の観光を伸ばしながら、北山・大塩方面の農産物や食を観光地で提供するなど、地域間で役割を分担し、村内で経済を循環させる考え方が示された。

すべての地区へ同じ施策を行うのではなく、地区ごとの背景や強みを踏まえて役割を明確にし、その成果が村全体へ還元される計画とすることが求められている。

また、北山・大塩方面と桧原・裏磐梯方面では、同じ村内でもイベントや活動への相互参加が少ない。過去に行われていた地区間交流等を現在の形に見直し、住民同士がお互いの地域を知り、訪れる機会をつくる必要がある。

(11) 情報発信と地域ブランド

住民からは、イベント、文化活動、利用できる制度等について、開催後に新聞や広報で知ることが多く、必要な情報が事前に十分届いていないとの意見があった。

広報紙や新聞だけでなく、スマートフォン等から必要な情報をすぐに確認できる仕組みが求められている。単に情報を掲載するだけでなく、参加してほしい人へ確実に届ける方法を考える必要がある。

地域外への発信では、「北塩原村」という名称だけでは、場所や地域の特徴が伝わりにくいとの意見があった。

村名そのものを変更してはどうかという大胆な案も出されたが、その背景には、全国的な知名度を持つ「会津」や「裏磐梯」の名称を有効に使い、地域の場所や魅力を分かりやすく伝えるべきとの問題意識がある。

観光、移住、特産品等の情報発信において、「会津」「裏磐梯」等の地域ブランドを戦略的に活用する必要がある。

(12) 対話の継続と信頼関係の再構築

参加者からは、過去にも同様の話し合いが行われ、道の駅や交流センター等について意見を出したものの、その後何が実施されたのか分からず、今回も当初は期待していなかったとの率直な声があった。

過去の話し合いが具体的な結果へつながらなかった経験が、行政に対する諦めや、対話へ参加する意欲の低下につながっている。

一方で、今回、若い職員が地域へ入り、住民と同じ目線で一生懸命に話を聞く姿を見たことで、「残せるものは残し、自分たちにできることをもう少し頑張ってみようと思った」との前向きな声もあった。

住民の意見を聞くだけで終わらず、何を検討し、何を実施するのか、実施できない場合はその理由を説明する必要がある。

今回限りで終了するのではなく、定期的に地域へ出向き、住民と進捗を確認し、結果をフィードバックすることが、住民の当事者意識と行政への信頼を取り戻すうえで重要である。

4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・人口規模に合わせた行政区、祭り、役職、地域活動の見直し
- ・近隣集落との役割分担や地域活動の連携・統合の検討
- ・草刈り等、住民主体の地域環境整備への実行面での支援
- ・桧原湖や磐梯山の眺望を守る樹木管理と景観整備
- ・安全に景色を楽しめる撮影場所や停車・待避スペースの確保
- ・子どもや家族が自然、水辺、釣り等を体験できる場所づくり
- ・自然の遊び方を伝える人材や定期的な体験活動の充実
- ・道の駅における地元産品の売場、出品条件、飲食、休憩機能の改善
- ・ドッグラン、かまくら、そり遊び等を含む道の駅の通年利用
- ・住民が参加できる道の駅での小規模な飲食・物販・交流の仕組みづくり
- ・自宅周辺の除雪を含めた冬季生活支援の仕組みづくり
- ・移住者へ除雪方法等を伝える雪国適応支援
- ・公共交通、地域内送迎、移動販売等を組み合わせた生活支援
- ・地区管理の上水道の将来的な維持方法の検討
- ・交流センターを活用した日常的な交流の場づくり
- ・自然、食、文化、写真、宿泊等を生かした起業・移住支援
- ・利用可能な空き家や既存施設の把握と事業承継支援
- ・高齢者を含む住民が参加できる小規模な仕事・役割づくり
- ・地区ごとの強みを生かした村内の役割分担と経済循環
- ・北山・大塩方面と桧原・裏磐梯方面の住民交流の促進
- ・「会津」「裏磐梯」等の地域ブランドを生かした情報発信
- ・イベント、制度、地域活動等の情報を確実に届ける仕組みづくり
- ・住民意見の検討状況と実施結果を継続的に伝える仕組みづくり

5 まとめ

今回の対話では、長峯集落には、桧原湖や磐梯山を望む景観、道の駅、キャンプ場、豊かな自然など、多くの資源があることが確認された。

また、飲食、文化、動物との触れ合い、写真等に関する個性的な活動を行う人がおり、人そのものが地域の魅力となって、新たな来訪者や関わりを生み出していることも長峯周辺の大きな特徴である。

一方で、人口減少により、祭りや行政区の運営、草刈り、除雪、上水道、神社等を集落だけで維持することが難しくなっている。公共交通についても、運転免許を返納した後に買い物や通院等ができなくなるのではないかという不安がある。

今後は、新しいものを増やすだけでなく、景観、道の駅、交流センター、キャンプ場、空き家、既存施設等を整え直し、住民の暮らしと観光客の滞在、消費、交流をつなげる必要がある。

また、北塩原村を一つの方法でまとめるのではなく、地区ごとの歴史、生活圏、産業、強みを踏まえて役割を整理し、それぞれの地域が得意な分野で協力できる仕組みを構築することが重要である。

その際には、観光客を増やすことだけを目的とせず、現在長峯に暮らす住民が、地域の景観や自然を楽しみ、安心して暮らし続けられるかを判断基準とする必要がある。

今回の対話では、過去の話し合いが結果につながらなかったことへの失望が語られた一方で、職員が地域へ入り、住民の声に向き合う姿勢を見たことで、住民から「もう少し頑張ってみよう」との前向きな声も聞かれた。

この変化を一時的なものにせず、行政が継続的に地域へ入り、検討経過や実施結果を示しながら、住民とともに具体的な取組へつなげることが重要である。

住民、事業者、行政がそれぞれの役割を持ち、長峯の景観、暮らし、交流を次の世代へつなげていくことが求められている。

以上